

ロンドンの公文書館と大学図書館の魅力

南原 真

昨年度私は国内研究員になり、英国のロンドンに約2ヶ月滞在し文献調査をしました。私がロンドン大学大学院生で滞在した1990年代と比べて、文献調査が格段にしやすくなりましたので、その概要を紹介したいと思います。ロンドンに調査に行かれる方はデジタルカメラ、1ギガか2ギガのSDカードを数枚、軽量のノートパソコンを持っていかれることをお勧めします。

私は東南アジアの地域研究をしておりますが、アジアを中心とする文献収集に絞って話します。ロンドンでの文献収集の魅力はかなり効率的に調査や収集ができる点です。現在日本でも各研究機関や大学で貴重な文献の購入やマイクロフィルム化を進めています。文献の収集が分散化しており、資料の収集に時間がかかります。一方、ロンドンでは各機関に文献が集中しているため、あらかじめ研究テーマが決まっていれば数箇所集中して回ることができま

す。持っていくと、目的により短期の図書カードや利用許可書を発行してもらえます。ここではロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（以下LSE）を取り上げます。LSEの図書館は改装が終了し、以前と比べてかなり利用しやすくなっています。

この特徴は各種統計類や政府機関の調査書や報告書が充実していることです。地下の書庫には戦前から戦後にかけての統計類が書庫に整然と整理され、閲覧ができコピーも自由にできます。各国別に貿易統計や政府機関の調査書や報告書が並んでいますので、時間をかけて見ていくとおもしろいです。

スクール・オブ・オリエンタル・エンド・フリカン・スタディズ（以下SOAS）の図書館は、東洋とアフリカの地域研究の書籍が各地域と国別に歴史、文学、地理、音楽、社会、語学、政治、経済など幅広い分野で収集されています。英語だけではなく各言語で出版された書籍も収集しており、特に中国語と日本語の書籍については充実しています。各地域別、例えば東南アジアや中近東などのレファレンス室もあり、重要な文献を調べる時には便利です。大学図書館では一部の貴重本以外は自由にコピーができるので、デジタルカメラはあまり必要があ

りません。

大学図書館でも探している書籍が見つからない場合は、大英図書館に行くことをおすすめします。主要ターミナルのキングス・クロス駅に近い大英図書館はSOASからも徒歩で行ける距離にあります。利用カード作成にはパスポートが必要です。この大英図書館は以前には大英博物館の館内にありましたが、1990年代に現在の場所に新設されました。日本の国会図書館と比較してみると、規模、レファレンスサービス、貴重本の収集、インド関係の膨大な公式文書や資料を保管するインド・オフィス・レコード等、施設と内容の充実さに圧倒されます。ここではデジタルカメラは持ち込み禁止ですが、コピーサービスがあります。人文、社会科学、ビジネス、科学など専門に分かれた大きな読書室に入り、パソコンで見た書籍を検索して注文するとその部屋に書籍が書庫から配送されてくるシステムになっています。

膨大な文書を保管する公文書館

さてここからはロンドン郊外にある英国立公文書館（以下PRO）を紹介したいと思います。PROはロンドン市内から地下鉄で約1時間のキュー・ガーデンズ駅から徒歩10分位にあります。キュー・ガーデンズ駅はその駅名通り世界的に有名な観光地キュー・ガーデン（植物園）へ多くの観光客が訪れる駅でもありません。

PROでは英国の政府官公庁や軍関係の膨大な文書を保管しており、多くの研究者や英国人

特徴ある大学図書館

最初に大学の図書館をいくつか紹介します。日本で所属機関や図書館の紹介状（英文）を

が訪れています。ここを利用するにはパスポートを持参して利用カードを作成してもらうことが必要です。手荷物はロッカーに入れ、鉛筆、ノート、デジタルカメラ、ノートパソコンなど持込可能とされるものだけ室内に持つていくことができます。出入り口のゲートには監視員がおり、入退出時に一人一人手荷物を検査します。入室する際にはパソコンで、自分の座席（パソコン利用かどうかを選択）を指定し、入室すると指定した座席を利用することになります。ここでも文書に関してのセキュリティが厳しく、天井には監視カメラがあり、また監視員が絶えず室内を巡回し、文書が利用者に適切に扱われているかに細心の注意が払われています。私は以前にこの公文書館を何度か利用したことがありましたが、今回サービスが飛躍的に向上していることに驚きました。第一にデジタルカメラの利用が許可され、特定の文書以外は自由に撮影することができるようになりました。また、窓際にはデジタルカメラ専用の撮影スタンドが設置されています。第二に閲覧したい文書をパソコンで注文でき、かつ自分の座席番号に対応した文書保管ボックスが別室に設置され、そこに文書が運ばれてくるので、調査の効率が格段と上昇しました。後日それらの文書を再度見たい場合は、パソコンで指示すれば可能となっています。

ここでは英国の外交文書（以下FO）の1900年代から1940年代にかけてのタイを中心に調査しましたが、タイのバンコク、チェンマイから本省に送られた英国人外交官の文書は政治・経済のみならず各地域への旅行や探検記

等様々な分野を網羅しており興味深い内容を多く見つけることができました。英国人は本心に丹念に記録を残し、またその記録もきちんと英国本館で管理され閲覧できることにつづく感心します。こうした公式文書や貴重な資料の閲覧を利用するのは、英国人だけではなく欧米人や日本、中国を中心とするアジアの研究者も多く訪れます。また、研究者だけではなく英国人の老夫婦や英国が祖国のアメリカ人がここを訪れ、自分達の家系図を辿る調査をしている光景もよく見ます。何か分からないことがあれば、レファレンスの相談員に聞くこと手取り足取り親切に教えてくれます。

夏の天気が良い日には閉館後近くのテムズ川のほとりを散歩して、ロンドンの郊外を満喫するのもいいかと思えます。夏の日が暮れるのは午後8時から9時くらいです。川のほとりの遊歩道は、高級住宅街で有名な隣駅のリッチモンドまでつながっています。

ビジネス文書館とは

最後に紹介するのはロンドン市内にあるギルドホール図書館です。この図書館の特徴はビジネスの文書館を付設していることです。図書館の奥のコーナーがビジネスの文書館となっており、パソコンや目録で保管されている企業名が検索できます。ここでの利用は利用目的を係員に伝えれば簡単に利用できます。ただし文書のコピーは許可されていませんので、手書きでノートに写すかデジタルカメラの撮影になります。以前は自由にデジタルカメラの撮影はできませんでしたが、大変便利になりました。

私が調査していた企業はインチケープ・グループのボルネオ商会です。同社は1856年に設立されロンドンに本部を置いていたが、マレーシアのボルネオ島サラワク州やマレー本島での鉱山開発やゴム農園、北タイでのチーク材を中心とする森林事業を行い、サラワク、シンガポール、バンコク、チェンマイ、パタヴィア（現ジャカルタ）、香港に支店を設置し、東南アジアとの貿易で発展しました。この図書館にはこのボルネオ商会1社だけでも膨大な資料が保管されており、本社とバンコク支店の資料を調査するだけでも時間がかなりかかりました。19世紀の文書は手書きですが、本社の取締役会議の議事録はタイプで打たれたような達筆でしたが、その他の資料では判読できないような手書きも多くありました。1920～1940年代の文書はタイプで打たれ保存状況もよくデジタルカメラの撮影がかなり役立ちました。ここでも驚いたのは英国人商人の記録の多さと文書の内容の濃さでした。英国の利害が海外で侵害されそうな時はすぐに現地の英国人外交官とコンタクトを持ち働きかけ、また同業のライバル社とも協力しあうなど英国人商人の商魂を示す文書に出会いました。

以上簡単にロンドンにある公文書館や図書館を紹介しましたが、これ以外にも魅力のある所は多々あります。英国に行かれる機会があれば是非図書館めぐりをしてみてください。その際には、日本からこれらの図書館のホームページにアクセスされ、文書の保管場所を調べておくことをお勧めします。

（なんばらまこと 東京経済大学経済学部准教授）